釿始め

京都市上京区七本松通今出川上る

釿は，斧で粗く削った材木を平らに整える刃物で,建築を始める最初の工程を象徴する大工道具である。関西では「ちょんの」とも呼ばれる。平安時代の貴族の日記「中右記」の承徳元年(1097)12月２日条に小堂を建てる際に「手斧始」の儀式が行われたとある。のちに，大工が新年を迎えた仕事始めの儀式として行われるようにもなった。京都では昭和初期までは，１月２日に市内各地で行われていたという。その後，大工の労働歌である木遣音頭を伝えるため，大工の棟梁らによって，昭和43年(1968)４月に番匠保存会が結成された。翌44年から，千本釈迦堂(大報恩寺，真言宗智山派)の２月の節分(おかめ節分)で木遣音頭を披露してきた。釿始めの儀礼は，占易の名家と謳われた松浦久信の建築儀礼解説書『匠家故実録』(享和３年(1808)自序)の記述をもとに復元し，昭和56年(1981)から令和２年(2020)まで，太秦広隆寺で釿始めを行ってきた。コロナ禍による中断を経て，令和４年(2022)からは千本釈迦堂で，釿始めを行っている。

１月２日は，早朝から本堂前に祭壇を組み，その前に長さ６ｍの棟木を設置する。棟木は西側が元(根元)，東側が末である。その前には注連によって結界が張られ，その西側に大工道具一式，東側には槌が飾られる。午前10時，山門前から本堂まで棟梁を先頭に，弥栄雅楽会の楽人３名(笙・篳篥・横笛)，行司，一の番匠，二の番匠，脇司２名，小匠，音頭取，先導役，そして木遣音頭の「ゆりもち」を歌う音頭衆が続く。

本堂前では，まず「墨矩の儀」が行われる。行司が脇司２人に曲尺と墨壺と墨差しを渡し，脇司は棟木の両端に置く。次に，一の番匠と二の番匠が棟木の東西に分かれ，曲尺で水平を測る所作をする。続いて「墨打の儀」が行われる。小匠が一の番匠の墨糸を持って二の番匠に渡し，一の番匠が墨糸を弾いて墨を打つ。小匠が墨糸を戻すと，続いて二の番匠も同様の所作を行い，脇司が道具を片付ける。次に「釿打の儀」が行われる。行司が小匠に釿を手渡し，小匠は棟木の中央に立てる。そこに棟梁が登場し，西側の元，中ほど，東側の末で各３回，釿を打つ。釿を中央に立てて棟梁が退出し，小匠が釿を片付ける。次に「清鉋の儀」が行われる。行司が小匠に槍鉋を手渡し，小匠は棟木の中央に置く。そこに，一の番匠が行き，元，中ほど，末で各３回，槍鉋をかけた後，中央に置いて一の番匠が退出し，小匠が片付ける。次に，音頭取，先導役，音頭衆が祭壇と棟木の間に立ち，木遣音頭の「たぐり音頭」を歌う。歌の途中で，脇司２人がそれぞれ槌を持って棟木の元と末へ行く。棟梁が棟木の中央あたりに立ち，脇司が槌で棟木を打つ(槌打ち)。これは棟上げで行われる「棟槌の儀」を取り入れたものである。そして，「金鶏鳥」「祝歌(１～３番)」を歌い，手打ちとなる。番匠保存会の会長の挨拶の後，供物の餅が参列者に配られる。最後に，結界の四隅と中央を，洗米と塩，神酒で清められる。

(福持昌之)

行列（木遣音頭「ゆりもち」）

釿打の儀

木遣音頭

〔実施時期〕　１月２日
〔実施場所〕　大報恩寺(千本釈迦堂)
〔伝承組織〕　番匠保存会
〔文 化 財〕　京都市登録無形俗文化財「木遣音頭」(昭和58年６月１日登録)